

イアン・マキューアンの Amsterdam : モラル葛藤の欠如

著者名(日)	武藤 哲郎
雑誌名	Otsuma review
巻	32
ページ	49-57
発行年	1999-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00004136/



イアン・マキューアンの *Amsterdam*

——モラル葛藤の欠如——

武 藤 哲 郎

1. はじめに

1969年に総合食品会社社長ブッカー・マッコネル氏によって創設されたブッカー賞は昨年で30周年を迎えた。イギリス連邦、アイルランド共和国、パキスタン、そして南アフリカの作家が英語で書いた小説に与えられるこの賞は名実ともにノーベル文学賞に匹敵する実力をつけてきた。毎年各出版社から推薦される2冊の作品は合計100冊以上にも及び、その「ロング・リスト」は9月末ごろまでに審査員によって6冊に絞り込まれる。これがいわゆる「ショート・リスト」で、この中から一作品がブッカー賞に選ばれる。

昨年(1998年)の大方の予想はベインブリッジ(Beryl Bainbridge)の *Master Georgie* であった。舞台を19世紀半ばのロンドンからクリミア戦争中のコンスタンチノーブルに移すあたりいかにも意欲的で、孤児のマイアートルが主人ジョージに寄せる健気な愛も丹念に描かれている。彼女は一昨年もショート・リストに残ったほどのベテランで、ブッカー賞受賞はほぼ間違いないと思われていた。ところが、結果はイアン・マキューアン(Ian McEwan)の *Amsterdam* であった。私がこの作品を読んで、まず感じたのは「これが本当にブッカー賞なのか？」という素朴な疑問であった。確かに、サマセット・モーム賞を取っているだけに筋は面白い。クリーヴとヴァーノンの罵り合いに、ガーモニー夫人のテレビ会見を入れるあたりのタイミングはまさに絶妙である。ところが、テーマが残念ながら弱い。「モラル」をテーマにしているのは理解できるが、その掘り下げが足りない。事実、巻では“‘make-up’ nomination”, つまり今までの作品と「合わせて」の賞とささやかれている。具体的には、昨年ショート・リストに残らなかったものの彼の最高傑作と呼び声の高い *Enduring Love* のことである。実際、*Amsterdam* ではなくこの作品でマキューアンはブッカー賞を取るべきだったと見る人がかなり多い。*Enduring Love* には「現代社会における人間のモラル」をめぐ

る彼の真摯な主張があって、*Amsterdam* のテーマの弱さを補っている。本稿は、この点について考えるものである。

2. *Amsterdam* のクリーヴとヴァーノン

Amsterdam の冒頭は46歳で病死したモーリー (Molly Lane) の葬式で始まる。病名は明らかにされていないが、死際は自分が自分で何をしているのか分からない、はたから見ても恥ずかしいものだった。葬式に参列したのは作曲家クリーヴ (Clive Linly) と新聞の編集者ヴァーノン (Vernon Halliday)。二人は親友で、彼女の元愛人であった。もう一人の元愛人、外務大臣ジュリアン (Julian Garmony) も参列していたが、彼らとは犬猿の仲である。ヴァーノンは大手の新聞『ジャッジ』 (*The Judge's*) の編集長である。たいした能力もなく、友人も敵もないのが取り柄の、ただ運がよくて編集長に上り詰めた男である。『ジャッジ』は知識人向けの新聞だが、慢性的に販売部数が落ち込んでいて、シャム双生児のケンカを記事にして業績を回復しようとするヴァーノンに部下たちは反対出来ないでいる。モーリーの葬式から数日たったある日、夫で出版社を経営し『ジャッジ』の株主でもあるジョージ (George Lane) から彼に電話がかかり、重要な用件なのですぐ家へ来て欲しいとのことだった。一方クリーヴは千年祭に向けて作曲中で、音楽が人生全ての、「リズム、メロディーを『読む』能力は、言葉を学ぶ能力と同じように遺伝的に前もって備わっている」と鼻から信じているエリート音楽家である。彼は叔父から相続した大きな屋敷に住みつき、過去にはジョン・レノンとかヨーコ・オノらと交友があった。現在頭から離れないのは千年祭のプレミアで演奏するシンフォニーの主旋律である。それがなかなか浮かんでこない。眠れない夜モーリーのことが思い出され、左手に違和感があるのに気付く、彼はジョージの家へ出かけるヴァーノンをつかまえて、「もし自分がモーリーのような病気になったら安楽死させてくれ」と頼む。同じように頭の右半分には違和感を持つヴァーノンは、そのとき「考えさせてくれ」と言うが、ジョージからある写真を見せられた帰り、クリーヴの家に「分かった。ただ一つだけ条件がある。私にもそうして欲しい」と書置きを残す。

写真は、化粧をした外務大臣ジュリアン・ガーモニーが女性の下着をつけて淫らな姿勢をとっているものであった。モーリーが自分の寝室で撮った彼

の異常な性癖を表すもので、ヴァーノンはイギリスをこの悪徳政治家から救うために写真を新聞に載せたいとクリーヴに相談する。しかし、内心何とかこのスキャンダルで『ジャッジ』の販売部数を上げたい気持ちの方が強い。ジュリアンを嫌っていたクリーヴだが、予想に反して難色を示す。「道義に欠ける (lack of principle)」として、反対の理由を次のように説明する。

「モーリーのためさ。私たちはガーモニーが嫌いだ。しかし、彼女は好いていた。彼はモーリーを信用していたし、彼女もその信用に敬意を払っていた。その感情は彼らだけの私的なものだ。写真も彼女のもので、私や君や、君の読者には関係がない。モーリーは君の行おうとしていることを軽蔑するだろう。はっきり言って、君は彼女を裏切ろうとしているのだ」¹

このようにモーリーの心を大切にし、それを守ろうとするクリーヴはまさに「モラル」を守る騎士であった。ところが、湖水地方で見せる行動はまるで人が変わったようである。

クリーヴは予定していた湖水地方の小旅行に出かける。千年祭のシンフォニーの主旋律を仕上げるのが目的で、自然の山々を登っているうちに予想したように美しいメロディーが聞こえてくる。それを忘れないうちにノートに書き留めようとする、行く手に男と女が言い争っている場面に出会う。よく見るとただの言い争いではない。男が女の腕を取って岩陰に引き込もうとしている。

今明らかなのは選択に迫られていることだった。助けを求めているのなら、降りて行って女を救わなければならない。あるいは旋律が心にまだ残っているのなら、そこから逃げだして静かな場所で仕事を続けなければならない。何もしないで、そこにいることは出来なかった。²

結局彼は女を助けに行かなかった。人の命よりも「音楽」を大事にしたのである。人の心の尊さを説いた同じ人間が取るべき行動であろうか。ここで読者はマキューアの人物描写の不自然さを感じる。旋律の方を結局選んだにしても、モラルの葛藤や罪の意識に苛まれてよいはずである。それがほとんど

どない。クリーヴはそのあとそそくさとホテルに帰り、ロンドン行きの汽車に乗ってしまう。この「不自然さ」はかなりの力で読者の印象に残る。「感情の無さ」と指摘する批評家もいる。要するにマキューアンの *Amsterdam* での意図は、モラルの葛藤によって自分の考えるモラルを真摯に示すのではなく、モラルを見失った者たちの末路を面白おかしくコメディに仕上げることであった。

ロンドンでは写真の公表を翌日に控えたヴァーノンが最後の打ち合わせをしていた。巷は外務大臣の淫らな写真の噂で持ちきりで、『ジャッジ』の販売部数もここ数日過去の実績を塗り替える勢いで増えていた。ヴァーノンは鼻高々であったが、唯一の気がかりは、クリーヴである。忌々しい彼の反対を考えたとき、先ほどの編集会議で話題となった湖水地方の事件を思い出す。実はクリーヴが山の中で出会った男は連続8件の強姦魔で、当の女は命は助かったが、その後襲われた女性は殺されていた。もし彼が女を助けにその場に姿を現していれば、一人の命は助かったのである。今度はヴァーノンが電話でクリーヴのモラルを責めたてる番であった。

「警察に行ってくれ、クリーヴ。それが君のモラルの義務というものだ……シンフォニーよりも大切なものがある。それは人間と呼ばれるものだ」³

ここでも、マキューアンの性格描写に不自然さを感じる。モーリーの墓を暴くような行為をしているヴァーノンは、人が変わったようにモラルを説いている。クリーヴの場合と同様、プロット運びの無理が、具体的には二人が互いのモラルを責め立てるために交互に善と悪の役を務めなければならなくなったことが、性格描写の「歪み」となって現れたのであろう。ともかくも、二人の間には決定的な亀裂が生じ、あとは罵り合いである。そのとき、ヴァーノンの秘書がジュリアン夫人がテレビ会見していることを伝える。写真掲載を翌日に控えての彼女のテレビ会見とはいかなるものか、巷の人々もヴァーノンも固唾を飲んでテレビにくぎ付けになる。それは思いもよらない逆転劇であった。

テレビに現れたローズ・ガーモニーは外科医で、女の子の難しい心臓手術を終えたばかりで白衣を着ていた。全てがジュリアンの所属する党の演出で

あった。彼女は「夫との愛は大きく全てを許します」と宣言し、一枚の写真をテレビを見ている人々に披露する。それは、掲載を翌日に控えたあのジュリアンの淫らな写真であった。人々の驚きが静まったあと、ローズは「愛は悪意よりも強い」と言い、最後にカメラをじっと見据えテレビを見ているであろうヴァーノンに向かって「ハリデイさん、あなたは恐喝者の素質を持っていますね。あなたの持っているモラルはノミのように小さいのね」と言い放った。この会見のあと視聴者の同情は一変にジュリアンに傾き、ヴァーノンは一転して悪者になってしまう。他の新聞は彼を「ノミ」と笑いにし、同性愛者たちは新聞社の前でデモを行った。予定通り写真を掲載した『ジャッジ』はどこか滑稽であった。結局、ヴァーノンは一連の責任を取らされて新聞社を首になってしまう。

一方、クリーヴはヴァーノンと電話で罵り合ってから仕事が手につかない。その腹いせに‘You deserve to be sacked’と葉書に書いて彼に送る。このとき、ヴァーノンはまだ新聞社を首になっていなかったのだから、言葉の意味は「お前なんか首になればいい」というくらいのものである。ところが、葉書が届いたときはすでに首になっていた。すると意味は「ざまあみろ」と毒の強いものになる。この偶然がヴァーノンの心に殺意を生まれさせる。彼は警察に連絡を取ってクリーヴを証人台に立たせ、「殺人幫助罪」という言葉をちらつかせる。いやいやながらマンチェスターに向かう飛行機の中で今度はクリーヴの心に殺意が浮かぶ。

オーケストラのリハーサルがアムステルダムで行われることになった。ここはイギリスと違って安楽死が法的に認められ、闇で薬が売られている。互いに「安楽死」を約束した彼らにとって最適の場所である。ようやく曲を仕上げたクリーヴ、そして仲直りがしたいと言ってわざわざ当地へ出かけてきたヴァーノンがレセプションで顔を合わせる。「クリーヴがシャンペンのグラスを置こうとして振り向くと、そこへヴァーノンがにっこりと微笑んでやって来るのが見えた。運悪く彼もシャンペンのグラスを二つ持っていた」とある。それぞれ一つのグラスには毒が入っていて、それを飲んだ二人はホテルの自室で夢を見ながら死んでいく。クリーヴの場合、湖水地方で助けなかった女が夢に出てくるが、女はいつしかモーリーに姿を変え「助けてほしかった」と言う。つまるところ、マキューアンはやはりクリーヴのモラルを責めているのである。小説の最後で、彼の作曲したシンフォニーがベートーベ

ンを盗作した駄作であることが分かり、プレミアが中止となる。そして二人はそれぞれが希望をなくして自殺したと新聞に報道されるが、ジュリアンだけは二人が殺し合ったことを信じて疑わなかった。

マキューアンの *Amsterdam* への批評を見てみると、まず *TLS* では「彼は自分の書いた本を『小説』と『娯楽』に分けているが、明らかにこの本がどちらのカテゴリーに入るのかは疑いない⁴」として娯楽性に重点が置かれていることを指摘している。『アマゾン・コム』の批評を見ると、リサ・ジャーディンは「マキューアンの登場人物はプロットのひねりのあまり奇妙にも感情に欠けている」と言い、カーカス・レビューは「並みの小説で英国スタイル、表面は力強いが中身が空虚」と手厳しい。要するに批評をまとめる *Amsterdam* は読んで面白いが中身がないということである。「中身がない」というところをもう少し具体的に考えてみると、『アマゾン・コム』の一般読者のコメントが参考になる。ある読者は「多くの人々からよい小説だと思われてはいるが、たぶん“make-up” nomination’でしょう。専門家はマキューアンが *Enduring Love* でブッカー賞を取るべきだったと思っている」と述べており、もう一人の読者は「展開されるべきモラルの葛藤がされていない」と指摘が具体的である。⁵ 要するに、この小説での彼の目的は、やはり、モラルの葛藤によって「モラルとは何か？」を掘り下げるのではなく、モラルを失った男たちの末路をブラック・コメディとして描くことであった。しかし、*Enduring Love* では、モラルの葛藤を登場人物に十分にさせて、彼の考えるモラルを真摯に示している。

3. *Enduring Love* のジョーとローガン

小説は冒頭から、主人公ジョー・ローズ (Joe Rose) が、気球に取り残された子供を数人の男たちと一緒に助け出そうとする場面から始まる。その日は風がかなり強く、パイロットは子供を気球に残したままロープを地面に固定させようとしていたが、ロープが足に絡まり気球ごと引きずられ始めた。子供の悲鳴を聞いて駆けつけたのはジョーのほか、42歳で医者ジョン・ローガン (John Logan) と28歳になる無職の青年ジェッド・パリー (Jed Parry)、そして二人の農場労働者であった。男たちは必死に気球を降ろそうとするが、想像を絶するような突風が吹いて彼らまでもが空中に舞い上がってしまう。行く手には崖があった。手を離さなければ彼らの命さえ危う

い。そのとき、誰か一人がロープを離したことによって気球は瞬く間に空に舞い上がり、男たちは次々にロープを離していった。混乱した状況下で、男たちの間には統率がとれていなかったが、もし全員で気球を押さえ続けていれば悲劇は起こらずに済んだとジョーはあとで思う。*Enduring Love* はこのように冒頭から読者を緊迫した場面に置いて、「モラルとは何か？」を考えさせる。

古代から、人間の本質に書き込まれた一つの契約がある。それは、言語能力の発達とは別の、狩猟を成功させる基本的な力、つまり「協力」である……「わがまま」も私たちの心に書き込まれてある。これが我々哺乳動物の葛藤である……何を他人に与え、何を自分に残しておくか。その線を踏みながら他人を監視し、自分も監視させるのが、我たちの言うモラルティである。⁶

マキューアンの考えからすれば、「モラル」は最初からそのジレンマを運命付けられていたのである。つまり、「自分を取るか、他人を取るか」。ジョーはこの事件のあと、モラルの葛藤に苛まれる。というのは、手を離したために一人の命が犠牲になったからである。それは気球に残された子供ではなく、その子供を救おうと最後までロープにしがみ付いて、やがて力尽きて地面に落ちたジョン・ローガンであった。

Enduring Love はこのあと意外な展開を見せる。その原因となるのがジェッド・パリーの変質的な行動である。彼は事件の間ジョーをじっと見詰めていた若者で、その日の夜遅く「君を愛している」とジョーに電話をかけてくる。それからパリーはストーカーのようにまとわりつく。朝、家の前でジョーを待っていたり、外出先まで尾行したり、そうかと思えば長い手紙を書いて「神を理解し、共に神のもとへ行こう」と言う。要するに、彼は一種の精神病——クレラムボルト症候群（宗教的色調を帯びたホモ・セクシュアル）であった。ジョーはこのことを妻のクラリッサ（Clarissa）に話す但彼女は半信半疑で、警察に話しても「具体的な危害が加えられていないからどうすることもできない」と言う。そうこうするうちに、ジョーから冷たくあしらわれていたパリーは暗殺者を雇ってレストランで彼を射殺しようとするが失敗する。頭を剃りあげたパリーを現場で目撃したジョーは再度警察に話す、

事実無根として取り上げてもらえなかった。いよいよ身の危険を感じたジョーは古い友人に頼んで銃を手に入れる。この間にパリーはジョーの家に押し入りクラリッサを人質にとって彼を呼び寄せる。最後にパリーはジョーによって射殺される。

レストランでの発砲事件が起きる前にジョーはローガン夫人に会いに行っている。彼は「自分は最初にロープを離さなかった」と言いたかったのである。彼女はこのとき思いもかけない事実を明かす。このあたりはマキューアのうまさであるが、ローガンが乗っていた車の中にピクニックの弁当と女物のスカーフが置いてあったと言うのである。彼はその日ロンドンで医師の会合があるとかで出かけたはずであるから、方向違いの公園で一体何をしていたのか。ローガン夫人によれば不倫相手と居たのではないかと言う。彼の死も、純粋に子供を助けようとする気持ちからではなく、その場にいた若い女性に勇気ある行動を見せたかったからと、ローガンのモラルに疑いを示す。夫人は最後にジョーに、何とかこの不倫相手の女性を探してもらえないだろうかと頼む。会ってどうするか聞いた彼に、彼女は「殺してやりたい」と素直に感情を吐露する。

Enduring Love の最後に、ジョーとクラリッサ、ローガン夫人とその子供たちが気球事件のあった公園へピクニックに出かける。パリーも死に、ジョーの証言が正しかったことも証明されて、今彼らは公園に再び戻ってあの事件のことを振り返る。そのとき彼らのもとに老人に付き添われた若い女の子がやって来る。ジョーが探し出した、あのときローガンの車に乗っていた問題の女性であった。ローガン夫人は身を硬くするが、実際話し出したのは老人の方であった。彼は大学の教授で、女の子は彼が教えている学生であった。30歳以上も年が離れているが、彼らは愛し合っていた。あの風の強い日、彼らはピクニックの用意をして公園にやって来たが途中で車が故障し、ローガンに公園まで乗せて来てもらったのであった。そしてあの事件が起きる。ローガンが気球から落ちる様子を目撃した彼らは気が動転してしまった。このまま残っていれば、彼らの関係が世間に知れ渡る。そこで彼らは大急ぎでその場から逃げたのである。老教授は夫人に「彼は非常に勇気のある人でした。それは私たち他の人間が夢見ることでは出来てもとても実行できない種類の勇気なのです」と告げる。彼は、夫人の疑いを晴らすために、辞職を覚悟で名乗り出たのであった。小説の最後で、ローガンのモラルが明らかになる。

彼は、他の男たちよりもほんの一秒ロープから手を離すのが遅くなって、空に放り上げられてしまった。クリーヴやヴァーノンだったら、いち早く手を離していただろうし、ローガンの行動を「ドジ」として片付けるに違いない。しかし、マキューアンは「ほんの一秒だけ他人を思いやる気持ちが他の男たちよりも強かった」と表現することによって、現代人が忘れかけた、あの狩猟世界での「協力」を思い起こさせる。「自分は最初に手を離さなかったはずだ」と葛藤に苛まれるジョー、逆に神の名を借りて強引にモラルを説く変質者パリー、これらの陰でローガンの取った行動は、それが最後に明らかになるだけに、すがすがしい印象を読者に与える。

4. まとめ

Amsterdam はブッカー賞受賞作としては何か物足りない。それは「娯楽」、「中身がない」、「“make-up” nomination’ に象徴されるようにテーマの弱さに起因する。加えて、人物描写もどことなく現実味がなく、喜劇に終わっている。しかし、*Enduring Love* と重ね合わせて読んでみると、マキューアンの考えるモラルが見えてくる。ローガンが束の間見せた「他人への思いやり」の姿は、クリーヴやヴァーノンを精神的に病んだ現代人として映す。実際、マキューアンは *Amsterdam* を同じような真摯なタッチで描けなかったというのが本当のところであろう。彼の考えるモラルとは、人間の本質に書き込まれた「わがまま」を剥き出しにするクリーヴやヴァーノンではなく、ローガンの行動に示されているような、人間が遠い昔に置き忘れた勇氣、人間が狩猟生活をしていたときにはもうその本質に書き込まれていた「協力」という人間としてごく本能的な行動なのである。

注

1. Ian McEwan. *Amsterdam*, Jonathan Cape., 1998, p. 75.
2. *Ibid.*, p. 87.
3. *Ibid.*, p. 119.
4. Phil Baker. 'Comfy conspiracies', *TLS*, September 4 (No. 4979), 1998.
5. *Amazon. Com.* 'Books: award winners', 1998-9.
6. Ian McEwan. *Enduring Love*, Jonathan Cape, 1997, p. 14.